

特 255
209

藤原宮遺構

藤原宮址顯彰會

始





大極殿跡

第一圖 藤原宮跡全景



(昭和十五年一月撮影)

壇基門前殿極大 圖三第



(昭和十四年十二月撮影)

址石礎廊廻 圖二第

特 255
202



瓦の 見發 陸宮 圖四第

藤原宮について

持統天皇御製

春すぎで夏來るらし白妙の

衣ほしたり天のかぐ山



藤原宮は持統天皇が天武天皇の御遺志を御繼承になり、紀元一千五百五十四年飛鳥浄御原宮から移御まし、て、元明天皇の和銅三年に平城の新都に御遷りになるまで、持統天皇、文武天皇、元明天皇の御三代

の皇居であります。而して藤原京は畝傍山、香久山及び耳成山の所謂大和三山の中間にあつて東西兩京に分たれ、各京は更に十二條四坊に

萬葉集



區劃されて、その北部には宮城が巍然と聳へて居り、これまでの御歴代の皇都に較べて非常に大規模な都城でありました。

併しながら、藤原宮の位置が三山中間の平地にあつたことは種々の方面から見て知られて居りましたが、その的確な宮址の決定は甚だ困難とされて、古來その位置に就いて種々の説が行はれて居りました。

我が鴨公村高殿の地がそれであると傳へる外、高市郡小原説・高市郡久米郷説・耳成山南麓説・十市郡説等があつたのであります。

高殿は高市郡なる我が鴨公村の大字で、耳成山の真南に當る廣い平地にあり、すぐ東には香久山が横たはり、西南に畝傍山を望んで、誠に三山にとり圍まれた好位置にあると申すべき處であります。この邊には大君・大宮・宮の口・北城殿・南城殿・中殿・孫殿・東冲殿・西冲殿・北京殿・南京殿のごとき、何か宮殿に關係あるかと思はれます地名があり、またこの附

近からは從來夥しい古瓦や、花崗岩の礎石や松香石の切石等が発見されたこともありました。更にこの附近にはいくつかの大小の土壇が殘存し、その顯著なものは小字大宮にありますもので、われ／＼村民はこれを「大宮堂」と呼びまして、妄りに土壇の上には登らなかつたのであります。而して我等鴨公村の村民はこの藤原宮址と傳へられてゐる土地に住んで私にその光榮を世に誇つて來てゐたのであります。然るに、去る昭和九年文學博士黑板勝美先生が日本古文化研究所を設立せられまするや、その研究事業の一として藤原宮址の闡明を計畫せられました。新に調査研究されることとなつたのであります。かくして慎重なる御研究の結果、當村の高殿の地點を以てその多くの傳説地中最も有力なるものと御認めになつて、いよ／＼發掘調査を執行されたのであります。爾來今日に至るまで七年間繼續調査の結果、次々に見

事な遺構の發見相繼ぎまして、今も猶ほ調査研究中に屬しますが、既にこの地が藤原宮趾として間違ないものであると云ふ點まで明かになつた次第であります。今や日本古文化研究所の非常なる努力によつて、遂に藤原宮趾の正確な位置が立證され、その朝堂院一郭の規模や大極殿の趾が闡明されるに至つたことは、實に我が國史上特筆大書すべき事柄と申さねばなりません。時恰も光輝ある紀元二千六百年に際しかくも輝かしい成果を得られたことは、實に意義深いものと申さねばなりません。まことにわれ々村民の慶び何物にも比すことが出來ないものがあるのであります。仍てこの光榮の紀元二千六百年といふ記念の年にあたりまして、藤原宮趾顯彰會としましては、茲にこの聖蹟をよく保存し、また正しく世に顯彰し度いと念願から、その遺構の地點に標識を榜示し、又はその遺構の大様を記述して世に傳へるこ

四

とが出来ればと研究所長黑板先生に御願ひ申しました次第でありませう。たゞ日本古文化研究所に於ては未だ調査中でもあり、また先年一部の報告書をお出しになつたのみで、その後の大發見にかゝるものは未だ研究所としては公にされてゐない今日にも拘はらず、幸にも本會の希望を御諒承の上特に現在までの調査成績の梗概を記述された次の一文を賜はりてこゝに本會の名に於て公にすることを得たのであります。誠に光榮と存じ敢へて之を世に顯彰する所以であります。

昭和十五年二月

高市郡鴨公村

藤原宮趾顯彰會長 殿村藤八郎

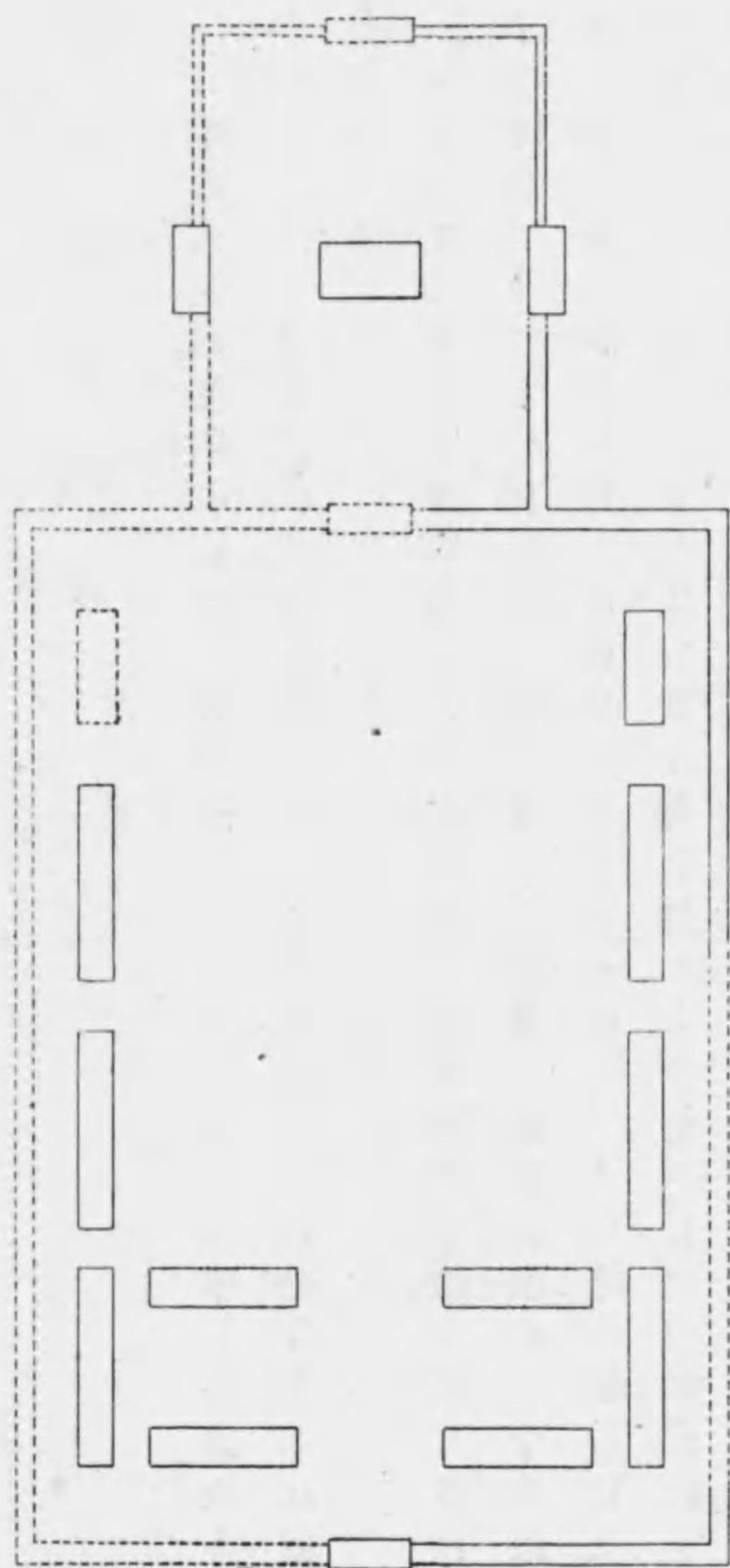
宮 趾 の 調 査

日本古文化研究所の高殿の發掘調査は、昭和九年に着手して以來、今年に至るまで大體農閑期を利用して七年間繼續して行ひ、今もなほ續行中である。

今日までの發掘調査の地域は高市郡鳴公小學校の南、約十五町歩に及ぶ範圍にして、この間に於て發見された建物の遺趾は既に二十棟以上に達し、更に廻廊の趾を明確にすることを得た。これ等の配置は次頁の見取圖に示すが如く、「大宮堂」土壇の地から發見された大殿堂趾を中心として、その南方には十二棟の殿堂が左右對稱を守つて整然と相並んでゐる。この高殿の遺趾全體の配置は平城宮や平安宮に於ける朝堂院の配置とよく一致してゐるが、この事實からすれば高殿の遺趾

發見建築跡見取圖

北方中央の大殿堂は大極殿跡、その南方の十二棟は十二堂跡、南端にあるのは南の門跡、四圍は廻廊跡である。圖中點線の部分は遺跡埋滅又は未發掘のところである。



は藤原宮朝堂院の一郭と認むべきであつて、大宮堂土壇の大殿堂跡は實に大極殿跡と考ふべく、その南方十二棟の殿堂跡は所謂十二堂跡と認めて差支ないであらう。尙今回の發掘によつて夥しき軒瓦が發見されたが、その文様は明かに白鳳式の特徴を示し、中には持統天皇御造營の本薬師寺跡より出土する古瓦に酷似してゐるものがあるのは、上記の建造物の造營年代を示すものとして注目すべきであらう。

この朝堂院の規模は頗る大きく、南北約五町、東西約二町半の廣き敷地に、二十數棟の殿堂・門・廊等が堂々と布置されてゐたわけで、平城宮や平安宮の規模と雖もこれに一籌を輪するものたるは重視すべき點である。また個々の殿堂も頗る大きく、大極殿と推定されるものは正面百十四尺、側面六十尺、また十二堂と推定されるものゝ中には正面二百五尺、側面四十尺に及ぶものが六棟もあり、その偉觀は蓋し時人の眼を

驚かしめた事であらう。

凡そ我が國に於て朝堂院の規模が明かに知られたのは實にこの藤原宮址を以て權輿とする。即ち平城宮の朝堂院はその土壇の位置によつて漠然とその配置の大様が知られるのみであり、また平安宮のそれは單に古圖及び文献上より推定され得るのみである。これに反してこの藤原宮の遺址はその全體の配置は勿論のこと、個々の堂宇の平面に至るまで一々實物によつて判明してゐるのである。斯くの如くその實際が明瞭となつた朝堂院址は國史の前後を通じて現在に於てはたゞ藤原宮のみである。

藤原宮御井歌

安見しし わご大君 高照らす 日の皇子 あらたへの 藤井が
原に 大御門 はじめ給ひて 埴安の 堤の上に あり立たし
見し給へば やまとの 青香久山は 日のたての 大御門に 春
山と しみさびたてり 畝火の この瑞山は 日のよこの 大御
門に みづ山と 山さびいます 耳梨の 青すが山は そともの
大御門に よろしなへ 神さびたてり 名ぐはし 吉野の山は
かげともの 大御門ゆ 雲居にぞ 遠くありける 高知るや 天
の御かけ 天知るや 日の御かけの 水こそは とこしへならめ
み井の眞清水

(萬葉集)

398
161

昭和十五年三月十五日 印刷
昭和十五年三月三十日 發行

著者

奈良縣高市郡鴨公村役場
藤原宮趾顯彰會

右代表者

殿村藤八郎

印刷者

東京市京橋區京橋三丁目十一番
吉川弘文館
振替東京二四四番
電話代表京橋一四一番

東京京橋川仁堂印刷

終

